

第九章

昔の記録を読む

皆さんは博物館などに展示されている古文書を見たことはありませんか。

「古文書」は、文字通り昔の人が書いた手紙や証文、日記などの文書類のことであり、「こもんじょ」と呼んでいます。

和紙にくずし字で書かれ、「御座候」などことばや表現も難しいですが、古文書からは昔の人の考えや行動を直接知ることができます。

栗野にも多く残されている古文書や古い記録には未調査のものも多く、地域の歴史を解明するヒントが眠っているかもしれません。



▲「源蔵日記」の表紙

「奥の細道」をたどった池澤楳好の日記

●俳句をたしなんだ永野村の名主

江戸時代の後半にあたる文政三年（一八二〇）の五月一日、下永野村の名主（今の村長）・池澤兵右衛門包教は、友人と二人で東北旅行に出発しました。この旅行は、松尾芭蕉の「奥の細道」の名所をめぐるものでした。兵右衛門は、名主をしながら俳句をたしなんだ人で、俳人として「楳好（※記録によつては棋好）」という名前も持っていました。楳好の残した『奥州・出羽・越後行脚日記』から、その旅路を追ってみましょう。

そもそも楳好は、年明け早々に出発しようと考えていました。しかし、名主の仕事が忙しく出発が遅れてしまいます。三月末には仕事が一と段落しますが、四月は雨ばかりで、やはり出発できませんでした。そして、快晴となった五月一日、ようやく家を出たのです。日記は次のように始まります。

（現代語訳）

文政三年辰年の春、奥州筋を行脚しようと星野（栃木市）の熊倉柳尾と計画をしたが、正月から三月下旬までは名主の仕事があつて出発できなかつた。四月は上旬から末まで毎日雨が降っており、ようやく五月の一日に快晴になったので取るものも取りあえず旅立った。しかし、川の水は、とても深かつたので西方郷から羽生田通りを通じて宇都

宮まで行ったら……

●二カ月にわたる東北・北陸旅行

この続きを日記から追ってみましょう。

宇都宮を抜けた楳好たちは、五月三日に芦野（那須町）にある遊行柳を訪ねます。ここで、平安時代の歌人西行の「道のへ 清水流る、柳かけ」と、芭蕉の「田一まい 植て立さる 柳かな」という歌碑を見ました。

五月一〇日には、仙台に到着します。国分町の三浦屋を宿にした二人は三浦屋に案内を頼んで仙台の町中を見物しました。二日間の名所見物を堪能した二人は、一三日に仙台を出発すると、末の松山（宮城県多賀城市）や塩釜大明神（宮城県塩釜市）などの奥の細道ゆかりの地をめぐり、やはり芭蕉と同じく船で松島にわたりました。松島のページには、芭蕉「松島や 扱松島や 松島や」（芭蕉の句として有名ですが、芭蕉の句ではありません）や、芭蕉と旅を共にした曾良の「松島や 鶴に身をかかれ ほととぎす」など松島を詠んだ句が書かれています。

そして、今度は西に進路を変えて山形方面に向かい、天童（山形県天童市）や羽黒山（山形県鶴岡市）にお参りしながら、五月二三日には日本海側の酒田（山形県酒田市）に到着しました。途中の鶴ヶ岡城下では相撲見物なども楽しんでます。ここからは、越後国（新潟県）の日本海沿いを南下していきます。六

月三日、新潟（新潟県新潟市）に到着しますが、翌日からの大雨に見舞われて、新潟で一〇日間も足止めされてしまいました。本来、奥の細道では、ここから親不知・子不知を越えて、越中国（富山県）に向かうところですが、榎好たちの芭蕉の足跡を追う旅は、ここで終わりとなりました。彼らは、奥の細道の旅路から外れて、信濃国（長野県）の善光寺（長野県長野市）にお参りをし、二三日から二八日まで草津温泉（群馬県草津市）で旅の疲れを癒します。そして、三〇日に高崎（群馬県高崎市）を経て、七月二日に下永野の自宅に帰宅しました。およそ二〇〇kmにも及ぶ旅となりました。

●庶民の文化が開いた江戸時代

このように池澤榎好の日記からは、江戸時代の旅の様子はもちろん、榎好の豊かな教養を読み取ることができます。江戸時代の後半には、榎好のような庶民が文化に親しむことができるようになっていました。

榎好の他にも江戸時代の鹿沼には、文芸をたしなむたくさんの人たちがいました。例えば、安永七年（一七七八）の『鬢麓夜話』という俳諧の本には、なり松・素秋・如水・蘭汐などの鹿沼の俳人たちが名を連ねています。幕末には山及・聡長・木長などの人たちが活動しており、明治時代になると鹿沼で俳句結社「鹿鳴連」が結成されました。俳諧・俳句の他にも、鈴木栄寿

（和歌）や手枕歌種（狂歌）、山口安良（狂歌）、葦園正名（狂歌）、学廻門悟喜（狂歌）などの庶民出身の文化人も登場しました。

江戸時代は今につながる文化が開いた時代だったのです。

《参考文献》

松尾元保『ふるさと人物伝 栗野の人びと』栗野町役場、二〇〇一年



▲池澤榎好の旅のルート

激動の時代を記録した「源蔵日記」

江戸時代の終わりころ中粕尾村・布施谷組という集落に、組頭を務めた倉沢源蔵という農民がいました。組頭は村の代表である名主を補佐する役職で、文書の作成や計算に長けた人が選ばれました。

源蔵は、備忘のため身辺に起こった様々な事柄を公私分かつた「萬覚帳」と題した雑記帳に記していました。嘉永元年（一八四〇）から明治一三年（一八八〇）に亡くなる直前まで書かれたこの記録は「源蔵日記」（以下、日記）として、昭和五七年（一九八二）に刊行された『栗野町誌 栗野の歴史』に多く引用されています。日記からは、幕末から明治維新に掛けての慌ただし世相や農民たちの生活が分かるとともに、村政に臨む源蔵の誠実さや人柄を伺うこともできます。

●「源蔵日記」を読む

以下、日記の一部分を現代文にして紹介します（『』は解説）。

・嘉永元年（一八四八）春、疱瘡が流行る。世が騒がしい。

『日記は嘉永元年から始まります。疱瘡とは天然痘という伝染病のことで、この時代に流行を繰り返しました。』

・嘉永六年（一八五三）六月一三日 浦賀へ唐舟来る。御固とし

て、高役金を出すよう命令される。

『唐舟とは、アメリカから来航したペリー艦隊の軍艦（黒船）のことです。幕府から横須賀の沿岸防備を命じられた武州金沢藩主・米倉侯は領民に対し、沿岸防備のための負担金を割り当てました。中粕尾村には二六両余の負担金が命じられました』

・文久元年（一八六一）一月二日、江戸方面へ出発して水天宮に参詣、横浜から筑波山参詣、推野観音、大宝八幡宮を参詣し一二日に帰った。

『源蔵の旅好きな一面が伺えます。この他、奥州・武州・伊勢等へも旅しています』

・慶応四年・明治元年（一八六八）三月九日、前日より本日に掛けて旧幕府軍が梁田宿で合戦になり負傷者が多数あった。戸板・木の葉かご・むしろ等持ち寄り多くの村人が対応し、夜中に引き上げた。

『旧幕府軍は、永野村から大越路峠を越え粕尾・栗野を経て日光方面に向かいます。粕尾村通過の際、村民に荷物の運搬を手伝わせました』

・明治五年（一八七二）一〇月一七日、諸役立会の下、地券の取り調べ。中粕尾の村役人全員で縄入れし取り調べを行った。

《地券とは土地の所有権を証明する書類のことで、従来の年貢を廃止し地価に基づき課税する事業に伴い発行されました。縄入れ（測量）し正確な面積を把握するため、膨大な事務が発生しました》

・明治六年（一八七三）一〇月八日、中粕尾のこの地に学校が開校した。

《明治五年（一八七二）に学制が定められ全国に学校が続々と開設されました。この学校は中粕尾の森地区に設置された「養正舎」を指します。養正舎は後に粕尾第一小学校となりました》

・明治九年（一八七六）八月一三日、地租改正の調査で鹿沼宿へ出張した。九月二日に村に帰った。四日に出張し一〇月一〇日に帰った。出張日数は五八日に及んだ。

《源蔵は地租改正の仕事で鹿沼の役所へ二カ月間近く出張しており、大変な事務量だったことが分かります。明治九年には県当局や村役人は地租改正の仕事に明け暮れたようです》

・明治一二年（一八七九）九月一〇日、コレラの病除けのため中粕尾の上下双方の村の神社へ集合し村内の安全祈願を執り行った。

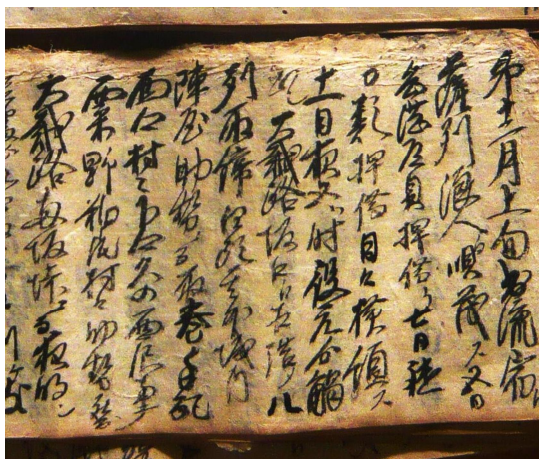
《伝染病であるコレラは明治に入ってから流行を繰り返して

いました。政府による防疫対策が整備される一方で、コレラ退散を神仏に願う「疫神祭」「コレラ祭」が各地で行われました。中粕尾でも役所から衛生対策を講じるよう指示されますが、神社への祈願を行うなど前近代的な様相を示しています》

《参考文献》

駒場一男「源蔵日記・幕末から明治まで」『鹿沼史林・第六二号』二〇二三年

駒場一男「源蔵日記を読む 明治5年から12年まで」『鹿沼史林・第六三号』二〇二四年



▲「源蔵日記」の原文

小学校に残る昔の記録

昔の記録や古文書というと、博物館などに大切に保管してあって、身近にはないものだと考える人が多いと思います。しかし、栗野には神社や寺、個人の家などに今も古い記録が多く残されています。実は、小学校も古い記録が残っている場所の一つです。

●小学校の誕生

鹿沼市内の多くの小学校は、明治五年（一八七二）八月に出された「学制」という法律をきっかけに翌年以降に創立したものです。江戸時代は、手習い塾などに通う子もいましたが、基本的に子どもへの教育は各家庭に任されていました。明治維新がおきると、新たに成立した政府は、近代国家を建設するために国民の教育を重視するようになります。そうして出された法律が「学制」です。

「学制」が出されたものの、栃木県はすぐに小学校を設立しようとはしませんでした。そこで久野村の安生順四郎（あんじょうじゅんしろう）³⁶ ページ）は、自分たちでお金を出し合って学校を設立しようとして動き出し、県にも小学校を設立するべきと書いた意見書を提出します。こうして、鹿沼をはじめ各地に多くの小学校が誕生しました。

●学校に残る資料

このように多くの小学校は一〇〇年以上の歴史を持っています。また、小学校は子どもたちだけでなく、地域の人たちが集まる場所でもありました。そのため、小学校は、学校の運営に関する記録はもちろん、地域の歴史を書いた報告書や、地域の青少年団や消防団などに関する記録、昔の生活に関するモノ（民具）、地域ゆかりの美術品、古い写真、近隣から発見された土器など多種多様な古い資料を保管しています。鹿沼市内の多くの小学校もいろいろな資料を持っています。

●清洲第一小学校から見つかった昔の記録

令和元年（二〇一九）一〇月、栃木県に大きな台風が襲来しました（令和元年東日本台風）。台風は、関東甲信地方と東北地方を中心に記録的な大雨を降らせ、鹿沼市内も大きな被害を受けました。このとき、一階部分が浸水した清洲第一小学校では、校長室に保管されていた古い記録が泥水に濡



▲清洲第一小学校所蔵資料レスキュー作業

れてしまいました。

鹿沼市では、汚れてカビが発生してしまった、これらの記録をレスキューし、クリーニング作業を行った後、今後も長く保存できるように資料の整理とリストの作成をしました。その結果、清洲第一小学校には、記録や写真が合わせて三一五六点あることが分かりました。

記録の中には、明治二十七年（一八九四）から大正四年（一九一五）までの「卒業生名簿」や、明治三三年（一九〇〇）から大正三年（一九一四）までの学校の基礎的な情報を記した「小学校一覧表」、明治四三年以降の卒業記念集合写真、昭和七年（一九三二）に編さんされた『清洲村郷土誌』の原本などがあります。どの記録も一度失われると取り返しのつかないものでした。古い記録は今も身の回りにたくさん残されています。ぜひ、昔の人の記録を読み解いて、自分の暮らしている地域や通っている学校について調べてみてください。

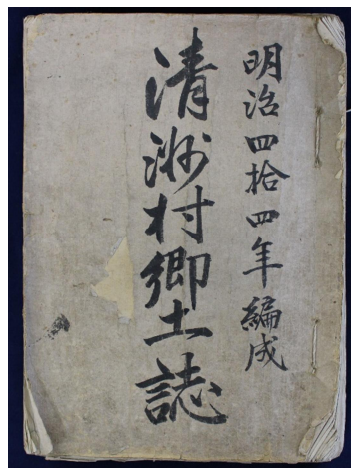
《参考文献》

地方史研究協議会編『学校資料の未来―地域資料としての保存と活用―』岩田書院、二〇一九年



▲卒業記念集合写真（清洲第一小学校所蔵）

この写真は清洲第一小学校に残されていた最も古い写真で、今から110年前の明治43年（1910）の卒業記念で撮られたもの。



▲『清洲村郷土誌』原本

清洲村の歴史や民俗を記録している。